

大学生のアクセント(1)

——近畿地方の中央式諸方言について(1)——

中 井 幸比古

1. はじめに

しばしば指摘されているように、近頃の若い人のアクセントは、どの方言においても、程度の差や個人差こそあれ、従来の伝統的なアクセントとはずいぶん異なったものになってしまっている。筆者が担当している、一般教育課程などの授業の受講生でも、教科書通りの伝統的な方言のアクセントを持った者はかなり少ない。そのために、伝統的なアクセントについて説明をしても、学生諸君にはピンと来ないといったことがしばしばある。また、一般社会人として、また教師（日本語、国語その他）として、共通語アクセントを習得する必要性に迫られた場合、自分自身のアクセントがどうなっているのかがわからなければ、当然、共通語アクセントの習得も不可能である。以上のような実際的な必要性にもかかわらず、また、かなりの数の報告が蓄積されつつあるにもかかわらず、若年層のアクセントの実態が充分明らかになっている方言は、ごく少ない。

このような状況の中で、筆者は先に、京都旧市内における若年層のアクセントの報告を行った（中井 1988・1989）。それに引き続き、本稿では、近畿中央部のやや広い地域に関する報告を行う：大阪府全域・和歌山県北部・奈良県北中部・兵庫県南部・京都府南部。いずれも、言うまでもなく、伝統的には中央式が分布している地域である。

近畿中央部を本稿で扱うのは、次のような理由による。近畿中央部の方言は、歴史的にはきわめて重要なものであるし、現在でも、共通語・東京方言以外ではもっとも有力な方言であるから、その変化の動向がきわめて注目される。また、筆者は、四国に分布する、中央式など諸方言における若年層のアクセントの実態解明を、現在の一つの研究課題としているが、近畿中央部の方言は、四

国各地の方言に対して、(それなりの)威光を保持しており、両者の関係に興味を持たれる。

本稿の具体的なねらいは次のような点にある。

(1)近畿地方の内部で、地域(性)によって共通語化や変化の速度にかなり違いがあるのではないかと、という仮説を実証すること。とくに、2モーラテ2型の音韻変化や、2モーラテ0型の所属語彙の変化について、その実態・地域差を明らかにすること。

(2)伝統的に中央式内部で地域差があるとされている点が、若年層でどうなっているのか、を明らかにすること。例えば、(次回の報告の範囲に属するが)3モーラコ2型の残存度や「食べる」の類のアクセントなど。

(3)近畿中央部の、アクセントに関する言語地図を描くこと。アクセントに関する詳しい言語地図は、近畿中央部については、若年層のみならず、伝統的な方言についても、少ない。

なお、本稿のテーマに関連して、上記拙稿公表の後、犬飼他(1989)と岸江(1990)が出た。

2. 調査の概要

2.1 話者について

下記3大学で、筆者が非常勤講師として担当していた、方言学・言語学・音声学のいずれかの授業を受講していた学生全員(約150人)を対象に調査を行った。本稿では、学生のうち、近畿地方の、伝統的には中央式が分布する地域の出身で、かつ移住経験が無い話者のみを扱う。但し、同一市町村内部の移住と、大学入学後の移住は認める。両親については制限を設けない。

- (a) 1988年度、大阪府河内長野市にある大谷女子大学の国文学科3回生(少数の4回生を含む)72名。(本稿で扱う話者の人数。被調査者の全数ではない。以下同じ)。
- (b) 1988年度、京都市左京区にある京都府立大学女子短期大学部の国文学科2回生16名。
- (c) 1989年度、神戸市西区にある神戸市立外国語大学2部英語英文学専攻2~4

回生 11 名。(男女共学であるが男子学生は 1 名のみ。) 以上合計 99 名。

話者の生年は昭和 42~44 年である。(c)大学には、より年長の話者が数名あるが、本稿では扱わない。

大学によって、学生の出身地構成にかなり違いがある。(a)は大部分が大阪府中南部・奈良県・和歌山県出身。(b)は西日本のかなりの地域にばらつくが、近畿地方では京都府・大阪府北部出身が多い。(c)は大部分兵庫県出身。さらに、もともと受講者数にかなり違いがあるために、地域によって話者数が相当異なる。本資料によって、大阪・和歌山・奈良の各県の状態はほぼ明らかにできたかと思うが、それ以外の地域については数が不十分である。種々の調査結果からして、大阪府北西部・京都府東南部から滋賀県あたりにかけて、話者がもう 20 名ばかりあればと思うが、近畿地方を離れたために、学生を話者にした資料の補充が困難であり、とりあえず、不十分ながら報告する。また、99 名の話者のうち 98 名が女性であるということも問題である。

表 1 及び図 1 に、話者の一覧を行う。

表 1 について。大学名の欄において、「大」は「私立大谷女子大学」、「府」は「京都府立大学女子短期大学部」、「外」は「神戸市立外国語大学」の略称である。両親の欄において、「両」は「両親ともに話者と同府県の出身」、「片」は「片方の親のみが話者と同府県の出身」、「異」は「両親ともに話者とは異なる府県の出身」。両親または片親の出身地が、中央式と異なるアクセントの分布する地域だとされている場合は、「()」の中にその出身地を示す。(括弧の中の注記がなければ、両親ともに、府県は違うが、中央式が分布すると思われる地域の出身である)。話者の排列はかなりランダム。アクセント体系の欄については次節参照。「所属語彙」は、伝統的に 2 モーラ テ 0 型の語彙の変化率を示したものであるが、記号の意味については図 3 参照。

出身地・居住歴の記入がやや不十分なものが数名あり、そういった話者の中には、移住経験がある者が若干含まれている恐れがある。従って、本稿で述べる地域差の記述や、収められている地図は、あくまで概略的なものである。また、「〇〇市」より詳しい住所がわからない話者が数名ある。そのような話者の結果を地図に記入する場合、その市内の任意の地点に便宜上書き込み、地点を

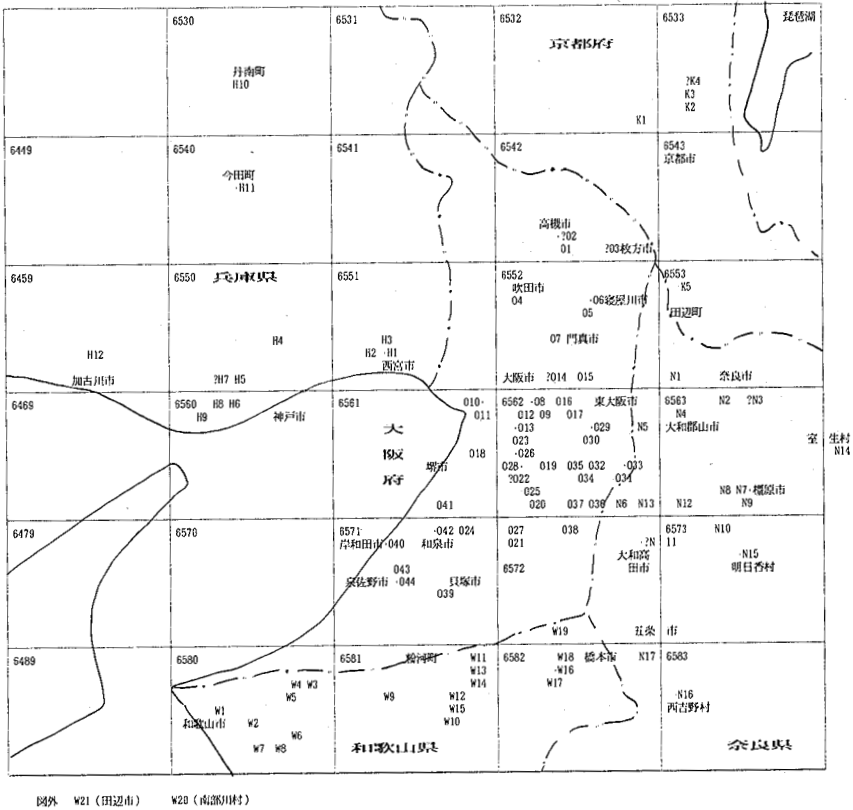
表1. 話 者 一 覧

地 点	大学	両親	体系	所属語彙変化
京都府 5名				
K1 京都市 右京区	府 共	f	●	
K2 京都市 左京区	府 異(片石川原)	f	●	
K3 京都市 左京区	府 両	f	●	
K4 京都市 ?	府 異(片石川原)	f	●	
K5 田辺町 下関戸	府 異	f	●	
大阪府 4.4名				
01 高槻市 ?	府 片(舞鶴)	nua	△	
02 高槻市 ?	府 ?	nua	△	
03 枚方市 ?	府 異(両城崎郡) t	-		
04 吹田市 岸部北	府 異(片福井)	nu	●	
05 寝屋川市 昭栄町	府 片	nu	×	
06 寝屋川市 太秦町	大 片	nua	△	
07 門真市 堂山町	大 外 片	nu	●	
08 大阪市 生野区	大 片	nu	○	
09 大阪市 生野区	大 大 片	nua	△	
010 大阪市 大正区	大 大 ?	nua	△	
011 大阪市 阿倍野区	大 異(両鹿兒島)	nu	△	
012 大阪市 阿倍野区	大 大 両	nu	△	
013 大阪市 住吉区	大 片(赤穂)	nu	●	
014 大阪市 ?	大 府 片	nua	△	
015 東大阪市 立花町	大 大 片(直方)	nua	●	
016 東大阪市 柏田西	大 片(片長崎県)	nu	○	
017 東大阪 大進	大 大 ?	nu	△	
018 堺市 東湊町	大 大 両	nu	○	
019 堺市 日澄荘	大 大 片	nu	○	
020 堺市 西野	大 片(島根)	nu	○	
021 堺市 庭代台	大 大 片	nu	×	
022 堺市 引野町	大 大 片	nu	△	
023 堺市 新金岡	大 大 片	nu	△	
024 堺市 新樟尾台	大 大 片	nu	○	
025 堺市 福田	府 片(福岡県)	nu	●	
026 堺市 中百舌鳥	大 異(両鹿兒島)	nu	○	
027 堺市 新樟尾台	大 異(阿北海道)	t	-	
028 堺市 野尻町	大 大 異(両愛媛)	t	-	
029 八尾市 東山本町	大 大 両	nu	○	
030 八尾市 刑部町	大 大 片(福井県)	nu	△	
031 柏原市 円明町	大 大 両	nu	●	
032 柏原市 玉手町	大 大 ?	f	○	
033 柏原市 旭ヶ丘	大 大 異(岡山県)	t	-	
034 羽曳野市 羽曳ヶ丘	大 大 ?	nu	×	
035 羽曳野市 向野	大 大 片	nu	○	
036 河南町 一須賀	大 大 両	nu	●	
037 富田林市 富美ヶ丘	大 大 片	nu	○	
038 富田林市 甲田1	大 大 片(岡山)	nu	×	
039 貝塚市 木積	大 大 大 片	f	○	
040 岸和田市 大手町	大 大 大 両	f	○	
041 和泉市 上町	大 大 大 両	nu	×	
042 和泉市 伯太町	大 大 大 両	nu	○	
043 泉佐野市 下瓦屋	大 大 大 両	nu	○	
044 泉佐野市 鶴原町	大 大 大 片	f	●	

地 点	大学	両親	体系	所属語彙変化
兵庫県 1.2名				
H1 西宮市 里中町	外 片	t	-	
H2 西宮市 松下町	外 異(片宮津)	nu	○	
H3 西宮市 久保町	大 府 異	fu	×	
H4 神戸市 北区	大 府 異	nu	○	
H5 神戸市 長田区	外 外 両	nua	×	
H6 神戸市 須磨区	外 外 異	nu	△	
H7 神戸市 ?	外 外 ?	nu	△	
H8 神戸市 須磨区	外 外 片(長崎県)	nua	×	
H9 神戸市 垂水区	外 外 両	nu	△	
H10 丹波町 南天代	府 府 両	f	○	
H11 今田町 上立杭	府 府 両	f	●	
H12 加古川市 米田町	大 外 両	nu	△	
奈良県 1.7名				
N1 奈良市 登美丘	府 片(福山市)	nua	●	
N2 奈良市 五条	大 異(福井県/石川)	t	-	
N3 奈良市 ?	外 片	nu	○	
N4 大和郡山 小泉町	府 片	nu	●	
N5 王寺町 久度	大 大 大 両	nu	○	
N6 当麻町 竹内	大 大 大 片	nua	○	
N7 橿原市 木原町	大 大 大 大 片	n	●	
N8 橿原市 曲川町	大 大 大 大 片	f	○	
N9 橿原市 膳夫町	大 大 大 大 両	f	●	
N10 橿原市 今井	大 大 大 大 両	f	○	
N11 大和高田 ?	大 大 外 ?	fu	○	
N12 大和高田 三和町	大 大 大 大 異	fu	○	
N13 大和高田 栗中	大 大 大 大 両	n	●	
N14 室生村 大野	大 大 大 大 両	f	●	
N15 明日香村 岡	大 大 大 大 異	f	○	
N16 西吉野村 黒淵	大 大 大 大 両	f	○	
N17 五条市 火打町	大 大 大 大 片	f	○	
和歌山県 2.1名				
W1 和歌山 西ノ庄	大 大 大 大 両	nu	○	
W2 和歌山 茶屋町	大 大 大 大 両	f	○	
W3 和歌山 直川	大 大 大 大 両	f	○	
W4 和歌山 直川	大 大 大 大 両	f	○	
W5 和歌山 六十谷	大 大 大 大 両	n	●	
W6 和歌山 吉原	大 大 大 大 ?	n	○	
W7 和歌山 塩屋5丁	大 大 大 大 片	f	○	
W8 和歌山 紀三井寺	大 大 大 大 大	f	○	
W9 岩出町 吉田	大 大 大 大 両	f	○	
W10 粉河町 荒見	大 大 大 大 両	f	○	
W11 粉河町 川原	大 大 大 大 両	n	●	
W12 粉河町 粉河	大 大 大 大 両	f	○	
W13 粉河町 川原	大 大 大 大 両	n	●	
W14 粉河町 西川	大 大 大 大 両	f	○	
W15 粉河町 粉河	大 大 大 大 両	n	●	
W16 橋本市 南馬場	大 大 大 大 片	f	○	
W17 橋本市 学文路	大 大 大 大 両	f	○	
W18 橋本市 東家3丁目	大 大 大 大 両	f	○	
W19 橋本市 胡麻	大 大 大 大 両	f	○	
W20 南郷川村 沼川	大 大 大 大 両	n	●	
W21 田辺市 中万呂	大 大 大 大 両	n	○	

示す「・」の右側に「?」印をつけた。また、狭い地域に話者が集中している地域などでは、実際の地点の位置と、地図上の地点表示の位置がずれていることがある。同一市町村内で移住の経歴があるものは、5才から13才のうちのもっとも長い期間過ごした地点を示す。不明の場合は、現住所を地図その他に

図1 調査地点



示す。

2.2 調査方法について

本来ならば一対一の面接調査によるべきであるが、話者の数が多く、たいへんなので、次のような方法を取った。

学生に、自分自身のアクセントを内省して紙に表記させた。(表記法は、特に問題がない限り、高音部に棒線を引き、モーラ内の下降調などは斜めの棒線を引く方法をとらせた)。さらに、調査票を音読し、録音してテープを提出させた。録音は各自学生の持っている録音機を使用させたので、音質に相当ばらつきが

あるが、過度に録音状態が悪くてアクセントの聞き取りが不可能というほどのものはなかった。但し、無声化されたモーラの音調など、聞き取りが微妙な場合は、音質が多少の影響を与えている恐れがある。録音時間は平均 30 分前後(面接調査なら一時間はかかる量)。

正しくアクセントを内省で表記できた学生は少数であり(よほど甘く点をつけても 99 名中 34 名)、大部分は相当でたためであった¹⁾そこで、本稿では、学生の内省は全部無視し、筆者が録音テープを聞き、アクセントをつけなおしたものを資料とする。なお、学生諸君の名誉のために(かえって不名誉になるかもしれないが)付け加えておくと、大部分の学生諸君は録音にまじめに取り組んでくれた。

録音に先立ち、数時間にわたって日本語諸方言のアクセントの概説を行った。(但し b 大学では授業時間数などとの関係で一コマだけ)。一応アクセントについての知識を持っているはずの話者を対象にできるというのは利点であると言えようが、しかし、逆に、ある程度先入観を持って読んでしまうという恐れもある。もっとも、学生の内省表記の精度から考えると、幸か不幸か、授業内容が調査結果に与えた影響は、少ないであろう。

調査票は、上野善道氏の「アクセント調査票 A」(私家版)を参照しながら作成した。ただ、調査票作成にあまり時間をかけなかったので種々不備があるものになってしまった。上記以外の方法で得た資料もあるが、今回はこの方法で得た資料に限って報告することにした。

なお、今回とった方法では、学生によって、かなり読み間違いをする。本稿をまとめるにあたり、あまり読み間違いが多いと思われる学生のものは、資料として使うのをやめようかとも思ったが、筆者の先入観で選別するのも危険なので、よい話者のきちんとした資料も、ずさんな資料も、同列に扱うことにする。99%読み間違いと思われる発話も、採用する。今回は、紙幅の都合で、アクセント体系・音調型と、2 モーラ体言の所属語彙についてのみ報告する。それ以外については次回に譲る。

3. アクセント体系と音調型

3.1 アクセント体系の枠組み・音調型は、伝統的には、和歌山県の2地点を除き、調査地点の全域で、中央式京都型が分布するとされている。

3.2.1 伝統的に中央式京都型が分布する地域について

本稿の話者には、次のような色々なタイプのアクセントがある。(ア)から(オ)までは、一応その順番に変化が進んだものと思われる。各タイプの名称は仮のもの。なお、本稿で、「変化」は「自律的变化 and / or 共通語化など接触による変化」を意味する。

- (ア) fタイプ：伝統的なアクセントと同じまたはほぼ同じ（拙稿 1988 p. 15 の、「a 段階」と「a と b の中間段階」の両者を含む）
- (イ) nタイプ：2モーラ テ2型のモーラ内の下降調はほぼ完全に失われているが、核はきちんと残っている段階（拙稿 1988 p. 15 の「b 段階」）
- (ウ) nuタイプ：さらに変化が進み、付属語をつけない限り、2モーラ テ0型とテ2型の音調の区別がまったくできない段階（拙稿 1988 p. 15 の「c 段階」²⁾）
- (エ) nuaタイプ：上記(ウ)の特徴をもち、さらに、1モーラ コ1型が、付属語をつけない限り、すべての環境で高平調になるもの。例：「毛」。「ケ」。「ケーナ」¹⁾ガイ。「ケー」トイトタ。（単独言い切りではほぼ短い）。cf. 「ケ」ガトナ¹⁾ガイ。「ケ」オレトイトタ。
- (オ) fタイプ：下記本文を参照。
- (カ) t型タイプ：式の対立なし。共通語と同じく、下がり目の位置のみが弁別的。

上記のうち、(ア) f (イ) nタイプについてはすでに上記拙稿で述べたが、(ウ) nuタイプの解釈については保留してあった(p. 16)。現段階では次のように考えている。付属語なしの場合は テ0、順接の付属語つきの場合は、単語ではなくて、文節全体を テ2と解釈する。

付属語なしの場合を テ0と考えるのは、具体的な音調のレベルで本来の テ0型とまったく違いがないこと、また、本来の テ0型と、所属語彙にかなり混

乱が生じていることからである。付属語つきの場合と付属語なしの場合（あるいは単語と文節）を別々に扱う点については反論があるだろうが、この解釈がもっとも現実的だと考える。

なお、本稿では、この「付属語無し テ0, 付属語つき テ2」という型も、混乱が生じない限り、便宜的に、伝統的な「テ2」に含め、そう呼ぶことにする。また、単に「テ0」という時は、特に断らない限り、伝統的な テ0型のみをさす。

(イ)n から(ウ)nu への変化のもう一つの理由として、従来触れられていないが、中央式では語末モーラの核（以下「語末核」）が嫌われ、消失する傾向が古い時代からずっと存在したという点があげられる。語末核は、恐らく有史以前に大部分が消失し、平安時代以来ずっと、おもに、わずかに2モーラ テ2型に残存しているだけである。その テ2型についても、ついに、文節末という環境で核が失われたわけである。しかし、文節末以外の環境では核が保存されている。nu 以下のタイプでは「語末核」が嫌われるというよりは「文節末核」が嫌われると言った方が適当であろう。

このように、nu 以下では、語よりも文節がアクセントの単位として重要な意味を持つと考えられるわけであるが、「語から文節へ」という変化の傾向もやはり平安朝以来ずっと続いている。平安朝では、アクセントの面で、付属語の独立度は現代よりも高かったと言われている。(但しスタイルも関係するかも知れない)。その後、徐々にその独立度が低くなっていった。そして、現在の老年層について、順接の付属語つきの文節と、単語単独の音調を考えてみると、例えば、およそ、コ0「鳥が」=「小鳥」、コ1「石が」=「命」、テ0「何が」=「雀」であるが、わずかに2モーラ テ2でだけ、「窓が」(2モーラ テ2+順接)≠「畑」(3モーラ テ2)である。なぜなら、「窓が」は第2モーラにモーラ内の下降調が現れることがあるから。しかし、今や、若年層のnu 以下のタイプではモーラ内の下降調は失われており、「窓が」=「畑」である。もちろん、nu タイプ以下でも、文節がアクセントの唯一の単位になっているのではない。語もある程度はアクセントの単位として機能している。例えば、付属語には順接だけでなく、低接・独立した辞・支配する辞がある。要するに、相対的に、

語の単位としての機能が低下したということである。なお、本稿の話者については、fタイプでも付属語つきではモーラ内の下降調が現れた例は一つもない(↓マ「ド」ガのみで↓マ「ド」ガはなし)。

nuタイプへの変化は、中央式内部に古くからあった変化の傾向の延長線上にある。

(4) fuタイプ。これは、(ウ)nuタイプに関連して、モーラ内の下降調を持ちながら、付属語なしで続けると核が失われるというものである。例:「窓」。↓マ「ド」。↓マド「ア」ケタ。おもに(アイ) f・nと(ウ) nuの境界付近に見られる。これは、拙稿(1989)の変化の過程に関する仮説と相容れないものである。もしもこのタイプを重視するならば、文節末核の消失がまずおこり、そのせいでモーラ内の下降調がなくなった、ということになる。しかし、本稿の話者でもfuタイプは3名のみであり、またその分布域から考えても、このタイプは局地的・例外的なものとして見て大過なからう³⁾。

(5) nuaタイプは本稿で初めて報告するものであるが、(ウ) nuからさらに変化が進んだものである。上記の「文節末核の消失」という素地の上に、「1モーラ語」の単独言い切りの場合が短くなったために起こった変化と思われる。即ち、1モーラ語が長ければ、単語単独の場合も、例えば「ケー。」は文節末のモーラに下降がないが、短い「ケ。」は文節末のモーラに下降がある。そのうえ後者の場合はモーラ内の下降調が現れてしまう。(2モーラでもモーラ内の下降調はすでに消失している)。但し、(5)についても、読み間違いにすぎないという恐れもないではない。

(6) tタイプについて。句音調について、話者O 33とH 1は、共通語と同じく、第二モーラから高。話者O 27とO 28は、句頭から高いか、あるいは徐々に上昇(但し上昇の度合はそれほど大きくない)。

便宜上(6)に含めたが、話者N 2とO 3は、支離滅裂としか言いようのない体系を持つ。ともに、句頭で、第一モーラから高いものや、第二モーラから高いもの、さらに遅上がりなど色々な音調が聞かれる。しかも2モーラでは、中央式でコ0型の語彙の多くのほうが、中央式でテ0型の語彙の多くよりも早くあがる傾向がある。中央式といわゆる垂井式の境界付近で報告されているア

クセントに似ている。(2モーラ以外ではこのような差はないようである)。また、「この」を前につけた場合も、中央式でテ0型の語彙の多くは低接する。従って、完全に式がないと断定するのは躊躇されるが、発話を聞いて低起・高起のいずれかの式に振り分けることは、筆者にとってはほとんど不可能である。こういった話者が日常の言語生活で一体どのようなアクセントを使って話しているのか、興味を持たれる。或いは、日常は共通語アクセントに近いアクセントを話しているが、今回の録音ではむりやり中央式アクセントで発話しようとしたためにこうなったのかもしれない。

3.2.2 中央式京都型以外のアクセントが分布するとされる和歌山県の2地点について。

田辺市(話者W21)は、中央式田辺型(低起式が第1モーラと第2モーラの間で大幅に上昇する)が分布するとされている。本稿の話者は、他地域の話者よりも多少低起式が早くあがるようであるが、さほど明瞭ではなく、前節nタイプと同じともみなし得る。なお、前節に述べたt以外のタイプは全員低起式遅上がり。

日高郡南部川村清川(話者W20)についての詳しい記述はないようであるが、本稿の話者は、田辺型と龍神型の間中間的なタイプである:レナ「ニ。レナ「ニガ。レスズ「メ。レスズ「メガ。レハリ「ガネ。(ハリガネガは未詳。以上テ0型の例)。南部川村は、龍神と田辺の間に位置する。この南部川村の話者は、正しくアクセントを内省できる、数少ない学生の一人で、内省でも上のように記述している。なお、低起式の大幅な上昇は、とくに単独言い切りや助詞付き言い切りで明瞭になり、続けるとやや不明瞭になる。拙稿(1990)で述べた、発話のスタイルと関係するものか。2モーラテ2型は付属語なしで続けると核を失うことに注意(図2ではnuに含めた)。飛び火か。(なお、この話者の録音テープは、ご希望があれば、お送りすることができる)。

3.3 アクセント体系・音調型の個人差の要因

前節で述べたアクセント体系や音調型の個人差の、要因について検討する。

3.3.1 地域差, 地域性との関連

t 以外のタイプについて。

t 以外のタイプについては, f から順に, 主に, 自律的に変化が起こっていったと考えられる。

図2 アクセント体系

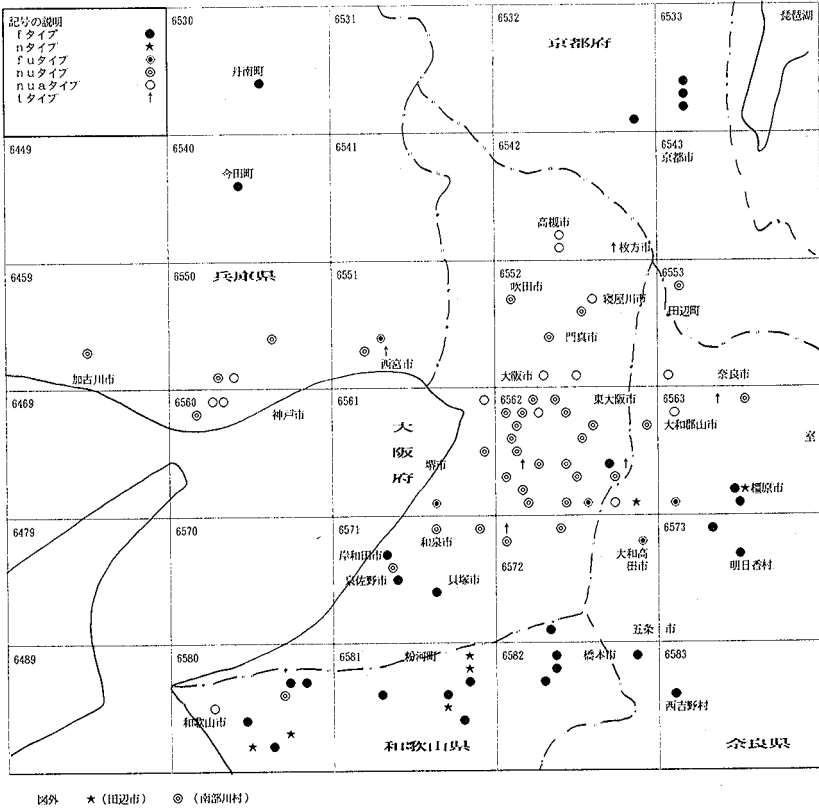


図2から分かるように、阪神両都市を中心に変化が著しく、それ以外の地域では保守的という、綺麗な周圏分布をなす。大阪城を起点とすると、少なくとも南と東の方向に関しては、およそ30キロ圏内で変化が起こっている。(但し、和歌山市等へは「飛火」したものと考える)。或程度は、大阪または神戸あたりから、地を這うように広がっていった変化という面もあるのかもしれない。も

しもそうだとすれば、徳川 (1972) にならって伝播の速度を測ることができる。nu 以下への変化が正確に何年前に起こったかは不明だが、仮に今から 30 年前に起こったとし、本稿の話者の言語形成期を今から 10 年前とすると、1 年に 1.5 km の速度ということになる。不思議なことに、徳川論文の平均伝播速度にかなり近い。但し、変化の発生から現在まで、等速で広がって行ったとは限らない。阪神両都市のあたりは、人の出入りが激しく、一旦起こった変化は、人の移動とともに急速に広がって行くであろうが、周辺の農山村地域では外部との交渉が少ないために伝播速度は遅いかも。本稿の分布図によると、現在の分布域は、少なくとも東と南の方向には、丁度、阪神両都市とそのベッドタウンの地域まで広がっているが、その外側の農山村域には食い込んでいない。だとすれば、何年前かに、ほぼ現在の分布域まで広がった後は、少なくともそれほど急速には、領域を拡大していないのかもしれない。

他方向に調査域を広げれば、やや違う結果が得られるかもしれない。

大阪から北方向について、大阪の真北の方向 (豊能郡から京都府郡部) では、南・東方向と同じような結果が得られるかもしれない。北東方向については、別に行った簡単な調査によると、京都府西南部や京都市の新興住宅地のあたりでは、本稿の話者には現れなかったが、nu タイプも、実は存在する。

大阪から西方向について。姫路市とその近辺では、都染 (1989) の記述による、2 モーラ体言 4 類語の所属する A 型から見て、「低年層」(本稿の話者よりも 8 才前後年下) では、nu タイプになっているかと推察される。(氏の記述そのものからは音調型が nu タイプ以下かどうかは不明である)。少なくとも海岸近くの平野部では、nu 以下のタイプがもっと遠くまで (あるいは垂井式にぶつかるまで全域に) 広がっているかもしれない。

都染氏上記報告では、姫路市街北方の、山間の農村部でもこの変化が起きているらしい。だとすれば、農山村でも変化が (急速に?) 広がりつつあることになる。これが事実なら、上に述べたことに相反することとなる。調査が必要である。ただ、本稿の調査地域の中でもっとも「辺境」にあたる、和歌山県と兵庫県山間部を比較すると、前者の方が後者よりはるかに古い特徴をよく保持していること (後述) は注意してよい。

tタイプについては、後述のように、たいてい両親の少なくとも一方が中央式とは異なる体系を持ち(次節)、かつよそ者がたくさん含まれている人の出入りの多い地域に育った場合にのみ、主に、現れるようである。

3.3.2 両親の出身地との関連

表2を参照。

表2. 両親の出身地と、ア体系・音調型

アの種類 両親	f	n	fu	nu	nua	t	合計
両	19	5	0	14	1	0	39
片	5	1	0	11	5	1	23
異	2	0	2	1	0	0	5
片()	0	0	0	6	4	0	10
異()	2	0	0	4	1	5	12
不明	2	2	1	3	2	0	10
合計	30	8	3	39	13	6	99

(数字は人数)

まず明瞭なのは、tタイプ(式の対立なし)は6人中5人までが「異()」、即ち、少なくとも片親は、中央式以外のアクセントが分布する地域の出身である。明らかに両親の影響と言えよう。しかし、「異()」であっても、fタイプの話者も二名ある。これは、両親の出身地だけでアクセント体系がきまるわけではないことを示している。その二人の話者はいずれも京都市出身であって、大阪市の近辺に比べれば人の出入りがまだしも少ない地域である。ある程度人の出入りが少ない地域では、幼児の世界で、本来の地域の方言というものが力を持っており、そうでないアクセントを持った両親のもとで育った幼児のアクセントを同化するだけの影響力を持っている。しかし、あまりに人の出入りが多いところや、雑多な出身地の人が寄り集まったところでは、幼児の世界で、地域の方言というものが同化力を持ちえないか、そもそも存在しない。その場合、異体系のアクセントを話す幼児がいても、そのまま放置される事もあるか

と想像される。西宮市の t タイプの話者の一人 (H 1) は両親とも中央式の地域の出身であるが、これは阪神間が人の出入りが多く、かつ、とくに東京志向が強い地域であるということと関係するか。しかしこの地域の話者数が少ないので何とも言えない。犬飼他 (1989), 真田 (1987) の調査結果も参照。

次に特徴的なのは「両」と「片」のタイプである。f・n と nu の二極分化が見られる。これは、話者自身の生育地の違いによるものである。即ち、阪神両都市の近辺では「両」でも nu に変化しているが、それ以外の地域では f を保存している。両親のアクセントは影響を与えることは与えるが、影響力はさほど強力ではない。

4. f・n・fu・nu・nua の 2 モーラ体言所属語彙

上記の f から t の種々のタイプのうち、f から nua タイプまでについて論じる。t については 5 節参照。

所属語彙の変化の要因について、すでに拙稿 (1988・1989) で述べた事柄で、改めて述べるに及ばないと考える点については、本稿では省略し、現象のみを報告することがある。調査結果の一覧が表 12 にあるので、参照のこと。

4.1 「時間空間を示す 4 類語」(中(ナカ), 外(ソト), 今, 此处, …) について

拙稿 (1989) で、これらの一連の語が、n から nu タイプへの、また、テ 0 (伝統的な音調の) から テ 2 (非伝統的な音調の) への語彙の変化の先駆になったのではないかという仮説を示した。この点について述べる。

今回調査したのは表 12 の 1.1 節にあげた 8 語である。(このうち、「他」については「時間空間を示す」という意味の範疇から外れるが、音調面では同じ振舞いをするようである)。(或いはこれらの語彙については「時間空間」とは別の範疇を設けるべきか)。しかし、付属語なしで続けるという環境でも調査したのは「中(ナカ)」と「外(ソト)」のみで、それ以外の項目が通常の テ 0・テ 2 と異なるかどうか不明である。従って、本節では「中・外」の二語についてのみ検討する。

まず、今回の調査でも、2語とも、付属語をつけなければ、アクセントのタイプに関わらず、全員伝統的なテ0型の音調と完全に一致する。「レナ「カ」。」や「レナ「カ」トミ」タ(見た)」のような音調はf・fuタイプにも現れない。

付属語つきの場合の音調について、表3・4を参照。表3は体系・音調型との関係を、表4は一般のテ0型の語彙の変化率との関係を示す。

表3・4で、「テ0」は「付属語つきで、伝統的なテ0型の音調に同じ」、
「テ2」は「レ〇「〇」▽のみ(▽は任意の1モーラ順接の付属語)」、
「テ0
テ2」は「上記二つの音調が現れる」。

表3について。f・nタイプでも「テ2」が現れている。従って、これらの

表3. 音調型・体系と、「中(ナカ)・外(ソト)」のアクセント

アのタイプ	中(ナカ)			外(ソト)		
	テ0	テ2	テ0テ2	テ0	テ2	テ0テ2
f	21	5	4	19	4	7
n	3	1	4	3	1	4
fu	0	1	2	1	1	1
nu	9	11	19	8	29	9
nua	3	5	5	3	9	1

(文節単位・数字は人数)

表4. 一般のテ0型の語彙の変化率と、「中(ナカ)と外(ソト)」のアクセント

表4-1 fu・nu・nuaタイプのみ

一般テ0型語彙 変化率	中(ナカ)			外(ソト)		
	テ0	テ2	テ0テ2	テ0	テ2	テ0テ2
25%以下	6	2	3	8	2	1
40 "	1	2	5	2	3	4
55 "	1	1	7	0	6	3
70 "	3	1	1	2	3	0
85 "	1	6	7	1	10	3
86%以上	0	5	3	0	5	3

(文節単位・数字は人数)

表 4-2 f・nタイプのみ

	中 (ナカ)			外 (ソト)		
	テ0	テ2	テ0テ2	テ0	テ2	テ0テ2
一般テ0型語彙 変化率						
25%以下	20	2	7	18	1	10
40 "	4	4	1	13	4	1
55 "	0	0	0	0	0	0
70 "	0	0	0	0	0	0
85 "	0	0	0	0	0	0
86%以上	0	0	0	0	0	0

(文節単位・数字は人数)

表 4-3 全タイプ (tタイプを除く)

	中 (ナカ)			外 (ソト)		
	テ0	テ2	テ0テ2	テ0	テ2	テ0テ2
一般テ0型語彙 変化率						
25%以下	26	4	10	26	3	11
40 "	5	6	6	5	7	5
55 "	1	1	7	0	6	3
70 "	3	1	1	2	3	0
85 "	1	6	7	1	10	3
86%以上	0	5	3	0	5	3

(文節単位・数字は人数)

語が、nタイプから nuタイプへの変化の先駆になっているという仮説が、一応実証されたと考える。しかし、nu や nuaタイプでも、テ0が少数ながら現れているのは問題と言えよう。

表4について。一応一般のテ0の語彙よりは変化率は大きいですが、一般の語の変化率が85%以上の話者にも、「中・外」に「テ0 テ2」も現れる。現実のアクセント変化の複雑さを思い知らされる。

表7に一般のテ0型の語彙の変化率との比較を行った。次節参照。

4.2 伝統的に テ0型の所属語彙(4類語のほとんど)

4.2.1 音調型・アクセント体系との関係

表5からわかるように、音調型・アクセント体系が保守的な話者は、所属語彙の面で保守的である。アクセントタイプがf・nの話者は、「25%以下」または「40%以下」しかない。この点は問題ない。

表5. 2モーラテ0型の語彙の変化と、ア体系・音調型

	アのタイプ					合計
	f	n	fu	nu	nua	
テ0 以外25%以下	24	5	1	7	3	40
" 40 "	6	3	0	6	2	17
" 55 "	0	0	1	8	0	9
" 70 "	0	0	0	5	0	5
" 85 "	0	0	0	8	6	14
" 86以上	0	0	1	5	2	8
合計	30	8	3	39	13	93

(文節単位・数字は人数)

しかし、音調型・アクセント体系の変化が著しい話者(nu・nua)は、概して所属語彙の面でも変化が著しいとは言えるものの、個人差が相当有り、中には所属語彙に関しては保守的な話者も若干見られる。この原因は次のようだと考える。即ち、上述のように、nu型への体系・音調型の変化は、おもに中央式内部に起因する変化である。それに対して、この所属語彙に関する変化は、共通語の影響もまた一つの大きな要因となっている。従って、nu・nuaであっても、共通語の影響をそれほどひどく受けなければ、テ0とテ2の音調が、付属語を付けない限り完全に一致してしまっているという悪条件下にありながらも、所属語彙の面では変化をさほど被らないことが有り得ると考える。注3も参照。

なお、表で語彙の変化率を15%刻みにしたのは恣意的である。但し、最初を25%以下にしたのは、後のようにfタイプ(または老年層)でも、「レ〇「〇」▽」が現れうる語彙が、当該調査語彙中24~27%程度含まれているからである。(表7の上位7ないし8語)。

語数を調査する必要がある。⁴⁾なお、旧市街地・本来の農山漁村といっても、新興住宅地に埋没してしまったような場合は、この仮説は当てはまらないと思われる。

なお、「人の出入りの激しさ」という量的な面(もっとも何%以上を「激しい」とみなすのかはまったく不明)にばかり注目してきたが、その他に「どこから・どこへ人が出入りするのか」ということも、大きな問題である。この問題について考えてみる。調査不十分なので馬瀬(1981)を参考にして、仮説を提示する。

a) 伝統的に中央式が分布する地域で、人の出入りが激しい場合

a1) 主に、中央式が分布する地域の内部で人が出入りしている場合：それほど変化は著しくない。

a2) 主に、共通語アクセントまたはそれに近いアクセントが分布する地域と人が出入りしている場合：共通語化は甚しい。中央式が負ける。

a3) 主に、共通語アクセントでも中央式でもないアクセントが分布する地域と人が出入りしている場合。やはり共通語化が甚だしい。以前なら、よほどよそ者の数が多くなければ、中央式が力を持っており、他体系を同化してしまったであろう。しかし、現在、中央式の力がそれほど強くはない。もちろん、他のアクセントは中央式よりももっと力が弱い。したがって、どれか一つのアクセントを選択することも、接触の結果新しいアクセントを生み出すこともできない。そこで、本来まったく存在しなかった、または少数の話者しか使っていなかった、共通語アクセントが選択される。共通語アクセントは、テレビを通じて現代の子供達には比較的習得がやさしい。

b) 伝統的に中央式が分布する地域で、人の出入りがさほど激しくない場合。出入りする地域がどこであろうと、変化は著しくない。

たしかに、真田(1990)の言うように、テレビアクセントの影響力は大きいと思われるが、それが強力な影響を与えるのは、少なくとも近畿中央部の中央式に関しては、今の所、a2)とa3)の場合に限られるのではなかろうか。

また、その地域の住民の、東京志向・地元志向の強さといったことも考慮に入

れなければならない。

4.2.3 変化の方向について

表6を参照。テ2への変化が著しいが、コ1への変化は顕著ではない。なお、もっともコ1への変化が著しい話者でも26%であり、20%以上の変化を示す者はこの話者も含めて、合計3名しかいない。本稿の結果は岸江(1990)に近く、真田(1987)のそれとは相当異なる。地域差ということもあろうが、真田(1987)では式の対立のないタイプも区別せずに記述していることも一因かもしれない。

表6. 2モーラテ0型の語彙の変化の方向と、ア体系・音調型

アのタイプ	所属語彙数			
	f0	f2	l1	l0
fnのみ	60	38	2	0
nu以下	48	47	5	0
nuaのみ	43	48	9	0

(文節単位・数字は%)

また、テ2型への変化が、真田氏の言うように過剰矯正の一種という面を持つとすれば、場面や話者の心的態度によって相当結果が異なる可能性がある。本稿のための録音では、学生は当然「共通語的ではないアクセント」で読もうとした。そうしたこともコ1型が少ない原因の一つであろう。そうだとすれば、共通語アクセントとの使い分け能力についても調査すべきであるが、今回の調査ではそれは含めなかった。ところで、以前、京都市の中学生(拙稿1988の話者)の何人かに、「共通語アクセントでならどうか」という調査をしたことがあるが、迷いに迷う話者が多く、時間ばかりかかって先に進まなかった。たしかに共通語アクセントとの使い分け能力はかなりあるのだが、一つ一つの語について検討していくと、話者の生育環境や地域にもよると思われるが、案外いいかげんなところもある。

また、本稿では伝統的にテ0型の漢語は調査語彙に含まれていないが、これ

は若年層ではアクセントのタイプにかかわらずほとんどコ1型に変化していることが予想される。

4.2.4 語による変化の割合について

表7参照。語によってテ0の保存率の割合は異なる。表では保存率の小さい順に並べてある。(f・n・nu・fu・nuaの諸タイプを含む)。

表7. 語によるテ0型保存率の違い

語	f0	f2	f1	f0
(今朝) け	13	84	3	0)
(今日) け	30	66	4	0)
(其処) ソコ	42	58	0	0)
(此処) ココ	43	57	0	0)
他) ホカ	45	55	0	0
屑) クズ	49	50	3	0
<外) ソト	50	50	0	0>
<中) ナカ	55	45	0	0>
跡) アト	55	44	1	0
麦) ムギ	64	32	3	1
麻) アサ	65	28	3	2
息) イキ	66	31	3	0
空) ソラ	66	34	0	0
藁) ワラ	67	23	10	0
種) タネ	67	32	1	0
船) フネ	67	31	2	0
海) ウミ	68	23	9	0
針) ハリ	69	27	3	0
肩) カタ	72	28	0	0
松) マツ	72	18	10	0
汁) シル	73	27	0	0
角) カド	74	26	0	0
板) イタ	75	25	0	0
箸) ハシ	77	13	10	0
帯) オビ	79	21	0	0
数) カズ	80	20	0	0
何時) イツ	93	7	0	0
何) ナニ	100	0	0	0

(文節単位・数字は%)

もっとも保存率が高いのは疑問詞の2語(「何時」と「何」)である。特に「何」は全員がテ0を保存している。なぜ疑問詞に古形が残存しやすいのかについてはよくわからない。この2語(特に「何」)は、各種の24時間調査によると、話し言葉で非常に使用頻度が高いが、そのことが、ある程度関係するのかもしれない。(蛇足ながら、授業で、中央式の2モーラテ0型の音調を説明するときには適当な語例が見つからなくて困ることがあるが、「何」はたいへん重宝な語である)。従って、現段階では、伝統的なテ0の音調を持つ語が完全に絶滅してしまった話者は、本稿の資料の範囲では、存在しないわけである⁵⁾。

逆に保存率が低い語彙について。括弧()でくくった上位4語は先に述べた「時間空間を現わす4類語」に属するかと思われる語彙であり、そのために変化が著しいと考える。括弧中の4語は、付属語なしで続けた場合を調査しておらず、f・fu以外のタイプでは、通常のテ0・テ2型と異なるかどうか不明なので、ここに便宜上含めた。また、f・fuタイプでも下降調が薄れたり、はっきりしない場合もあるので、ここに含めたが、明瞭な「↓○「○」。」が出たのは、「今朝」のみで、しかも奈良県の話者二人(fuタイプ)だけである。所属語彙の混乱のせいかと思われる。その他のf・fuの話者は「↓○「○」。」である。参考までに、「時間空間を現わす4類語」として先に論じた「中と外」についても一緒に示す(〈 〉で囲んだ)。

なお、「今日」について、表中の数字は「今日は雨」という例についてであるが、「今日の天気(コ1)」ではテ2が86%、テ0が11%、コ1が3%で、付ける付属語によって結果が異なる。

その次の「他」も、上述のように、伝統的に、話者によって、上記4類語に準じた音調にもなる語である。一つ飛ばして「跡(路面についた自動車の)」も、「後(アト、時間的)、上記4類語の一つ」との牽引のせいかと思われる。

前節で取り上げた「外・中」の2語の変化率は、これら一連の語彙の中で低い。これは、この2語は多くの環境(6環境)で調査したために併用が十分捉えられたが、他の項目は少ない環境でしか調査しておらず、優勢な方(多くの話者ではテ2)しか出なかったということであろう。また、表12の説明に書いた人数の数えかたも関係しよう。

「屑」はfタイプの和歌山県の話者にもテ2が現れる。悪い意味も関係しよう。(京都若年層でもテ2が目立つ)。或いは地域によっては伝統的にテ2だったところもあるかもしれない。

上記以外の語彙では、テ0の保存率は64~80%で、語による差異は案外少ないと言えよう。

テ0からコ1への変化はほとんどないが、「藁松箸海」でやや目立つ他は、全員4%以下である。

なお、今から二三年前(1987年か1988年)、佐藤栄作氏から、口頭で、中央式若年層(兵庫県中心)では、後続文節が高起式か低起式かで、テ0型の音調の残存率が相当違うという御調査結果を御教示頂いたことがある。今回の資料でも、高起式が後続する方がテ0型が残存しやすいといった傾向があるようだが、反対の場合もかなりある。この点については、聞き取りの際にきちんと記録しておかなかったので、細かい数字は遺憾ながら不明である。

4.3 伝統的にテ2型の所属語彙(5類語のほとんど)

地域差につき、図4参照。やはり阪神両都市とその近辺で変化が著しい。

アクセントタイプ・テ0型の所属語彙の変化との関連について、表8・9を参照。n・fタイプではほとんどテ2で安定しているが、nu以下のタイプにややコ1(共通語化)が目立つが、それほど顕著ではない。テ0型の所属語彙の変化とも或る程度は相関があるようである。語彙的には、「桶・足袋」と「鯉」のコ1が目立つ。

変化の方向はほとんどコ1に向かっている(共通語化)。テ2からテ0への変化はほとんどない。項目によって一名~二名テ0が現れるが、これは特定の話者に集中して現れるというよりも、色々な話者に散発的に現れている。

4.4 伝統的にコ0型の所属語彙(1類語のほとんど)

ほとんどの語彙がコ0型で安定しているが、わずかに注目されるのは「どこ」のテ0型と、「百合」のコ1型で、いずれも京都若年層でも散発的に見られるものである。

図4 2モーラテ2型所属語彙の変化

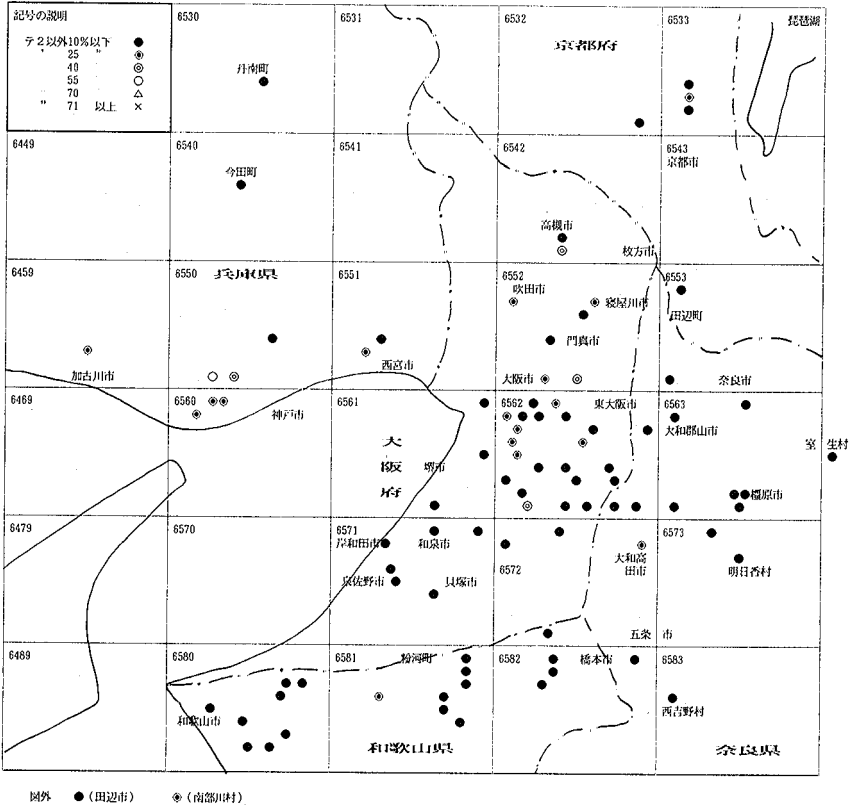


表8. 2モーラテ2型の語彙の変化と、ア体系・音調型

	アのタイプ					合計
	f	n	fu	nu	nua	
テ2 以外10%以下	28	8	2	26	6	70
” 25 ”	2	0	1	10	4	17
” 40 ”	0	0	0	2	3	5
” 55 ”	0	0	0	1	0	1
” 70 ”	0	0	0	0	0	0
” 71以上	0	0	0	0	0	0
合計	30	8	3	39	13	93

(文節単位・数字は人数)

表9. 2モーラテ2型の語彙の変化と、2モーラテ0型の語彙の変化

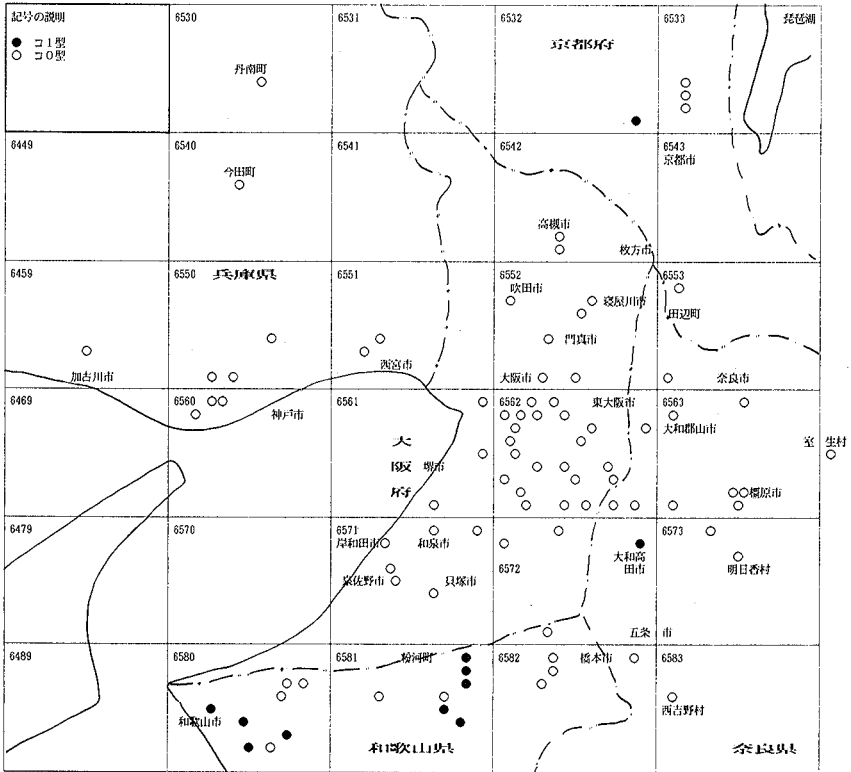
	2モーラテ0型の語彙変化						合計
	25% 以下	40% 以下	55% 以下	70% 以下	85% 以下	85% 以上	
2モーラテ2型の変化 テ2 以外10%以下	38	14	5	3	4	6	70
" 25 "	2	3	3	1	8	1	18
" 40 "	0	0	0	1	2	1	4
" 55 "	0	0	1	0	0	0	1
" 70 "	0	0	0	0	0	0	0
" 71%以上	0	0	0	0	0	0	0
合計	40	17	9	5	14	8	93

(文節単位・数字は人数)

4.5 伝統的にコ1型の所属語彙(2・3類語のほとんど)

これも、ほとんどの語彙がコ1型で安定している。ただし、図5～8に示すように、「あれ(指示語)、北、虹、人」の4語は、コ0型の話者が非常に多い。特に「あれ」に至っては伝統的なコ1はごく少数である。4語のうち、「あれ」は綺麗な周圏分布を示す。他の三語の図はそれほど綺麗ではないがやはり周圏分布的である。表10に示すように、アクセントのタイプで分けると、下に示すように、明らかに、伝統的なアクセント体系を有する話者は、「あれ」も含めた4語について、伝統的なコ1を多く保存し、アクセント体系が変化している者は、これら4語についてもコ0に変化している者が多い。また、表11に、これら4語と、テ0型の語彙の変化との関係を示す。これについても、表10の場合と同様の傾向を示す。これら4語は共通語アクセントで、0または0・2の併用であるから、コ0への変化は共通語化の可能性が高い。(但し「あれ」は「これ、それ」などとの牽引のほうが主因かも)。

図5 「アレ (指示語)」のアクセント



● (田辺市) ● (高松市)

図6 「人(ヒト)」のアクセント

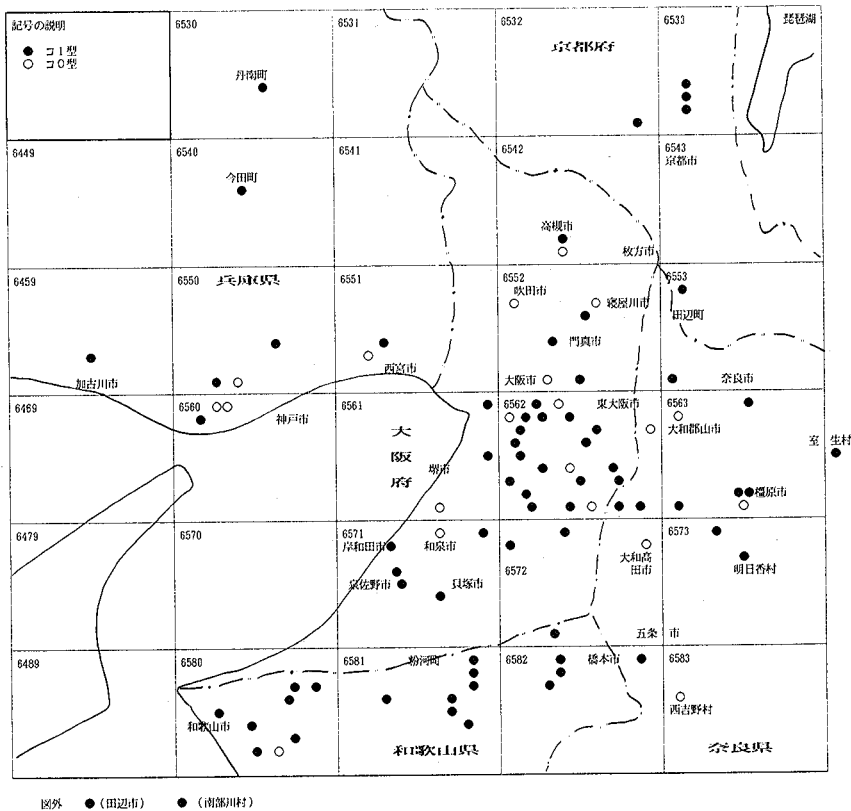
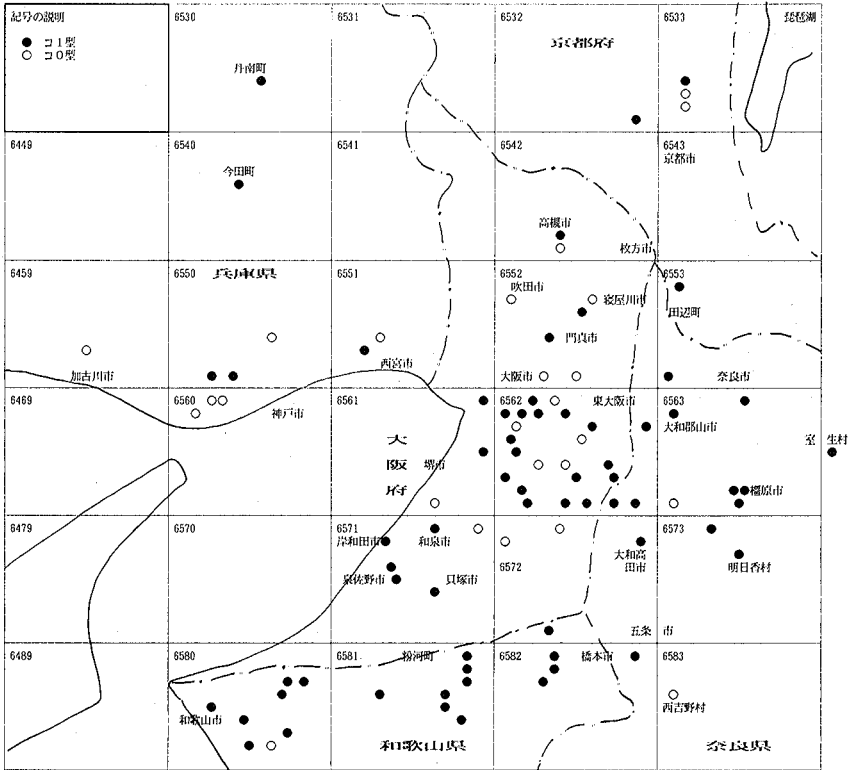


図7 「北(キタ)」のアクセント



図外 ● (田辺市) ● (南部川村)

表 11. 「北・虹・人・あれ」のア変化と、2モーラテ0型の語彙の変化

	北		虹		人		あれ	
	11	10	11	10	11	10	11	10
70 以外25%以下	35	5	24	15	34	6	8	32
" 40 "	12	5	10	7	13	4	4	13
" 55 "	7	3	2	8	7	3	1	9
" 70 "	3	1	0	5	4	1	0	5
" 85 "	7	7	1	11	9	4	0	13
" 86%以上	3	5	2	5	6	2	0	8

(数字は人数)

4.6 地域によって伝統的に希少型に属する可能性がある語彙

図9を参照。

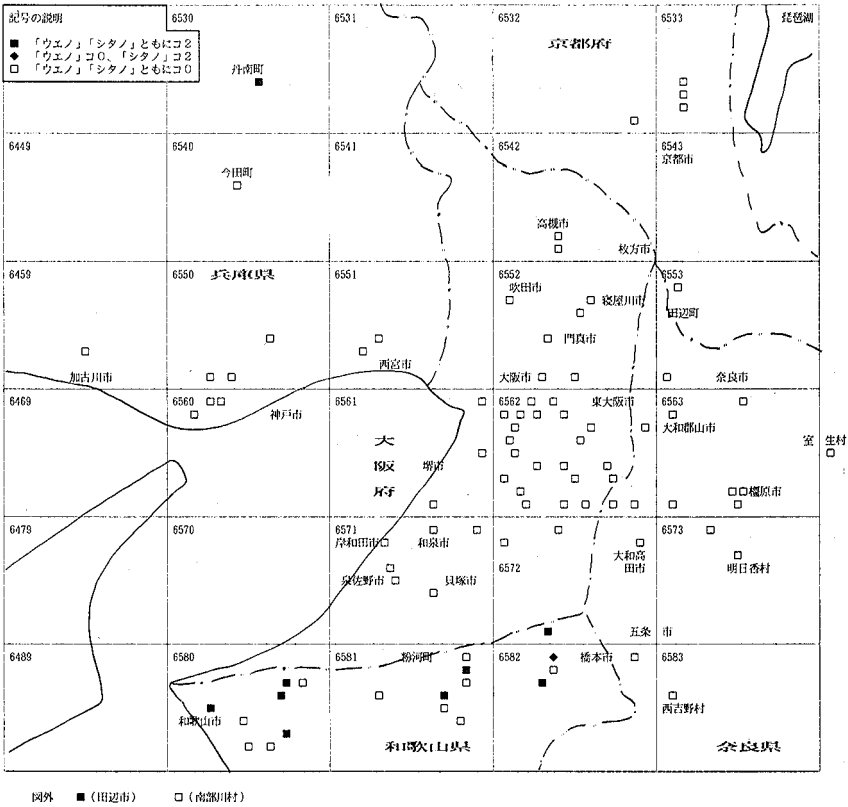
金田一(1977)に、和田實氏からの教示によるとして、神戸方言で、「上(ウエ)下(シタ)」の2語は、通常のコ0型の音調の他に、「[○○⁰」,「[○○¹ノ」にもなることがあると述べられている。本稿の話者については、大部分が通常のコ0型であるが、周辺部(兵庫県山間部の一地点と和歌山県のかなり広い地域)に「[○○¹ノ」となる話者がある。この話者の大部分はfタイプであるが、単独の場合は、テープを聴いた限りでは「[○○⁰。」のみで、「[○○⁰。」はないようである。従って本稿の話者の場合は付属語も含めて、文節全体を3モーラコ2型とみなすことができる。以下そのように扱う。

なお、金田一(1977)では、強調した場合に限りそうなると述べられているが、あるいは、それに加えて、よく熟した言い回しでコ2型が出やすいのかもしれない。本稿では「上の子」「下の子」(兄弟)で調査したので、わりあい多くコ2が得られたかと思われる。

拙稿(1987)の前書きで、「[○○¹ノ」の音調は3モーラコ2型体言の残存度と相関があるという予想を述べた。そしてその予想通り、次回の報告と関係するが、3モーラコ2型の残存する地域と、「[ウエ¹ノ」「[シタ¹ノ」の音調が現れる地域はうまく重なっている。

図中に「上の」と「下の」のアクセントが違う話者があるが、これはたんに

図9 「上の(ウエノ)」と「下の(シタノ)」のアクセント



たまたまそう読んだだけで、実際には両方とも併用であろう。また、両語ともコ2型で読んだ話者も、実は、全員、通常のコ0型との併用であろう。また、両方ともコ0で読んだ話者のうち、主に和歌山県の話者はコ2との併用の可能性がある。

4.7 その他伝統的に地域差などがある語彙

表12の1.7節の語彙がこれに該当する。すでに、全域で、「穴・皮・玉」はコ1からテ0に、「豆」はコ1からテ2に変化してしまっている。「鳩」は全域でテ2が非常に多く、京都旧市内老年層でかなり多く見られるコ1がごく

少ないのが注目される。「奥」について、テ0の一部は伝統的なアクセントの保存、テ2はテ0からの変化、という可能性もある。

5. tタイプの2モーラ体言所属語彙

話者 O33, H1 は、2モーラのみならず、用言の一部などを除き、ほとんど共通語アクセントと、所属語彙が同じである。

話者 O3, N2 は、所属語彙の面でも相当支離滅裂で、だいたい「1類0, 2・3類1～2揺れ, 4・5類1～2～0揺れ」, である。O27 もだいたいそれに準じるが、4・5類では、付属語なしで1, 付属語つきで2または0の傾向がある。(文節末核が嫌われている)。話者 O28 は、「1類0, 2・3類1, 4・5類は0～1揺れ」で、いわゆる垂井式と東京式の境界付近で見られるようなアクセントを持つ。あるいは両親のアクセントの影響かと思われる。しかし両親ともに愛媛県の出身というだけで、愛媛県のどの地域か不明なので、よくわからない。

注

1) でたらめといっても、まったく不規則にでたらめというものは少ない。出来が特に悪かったのは、低起式の大幅な上昇位置についてである。低起式と高起式とは、文節全体の音調の方向が違うので(上野 1989 の(口)の存在), 2段階表記では具体的な音調とややずれることも関係あるか。下がり目の位置は、3モーラまでについては、だいぶましである。特に、頭高型の場合は、わりあい正確に記入されている。

なお、内省がきちんと書かれている物の中には、実は併用(かりに a 型と b 型の 2 型とする)であるが、読んだ時はたまたま a, 内省でつけたのがたまたま b, というものも二三あるように見受けられた。しかし、このような場合もすべて内省は無視し、録音の方に従うことにした。

2) 拙稿 1989 p 15 の表中の 4b○「○」=○と 4c○「○」=○は、具体的な音調としては相互に区別できないものである。音韻論的な見方が混入した表記で、よくなかった。(上野善道氏の指摘による)。

3) 但し、付属語なしで続ける(例:窓開けたか?)という形は、日常の会話では頻用するのであるが、書き言葉ではそれほど使わないものであり、書いた物を音読するという調査の場合、人によって、案外読みにくいものらしい。そのせいで、本当は f または n タイプでありながら、fu または nu で読んでしまった、一種の読み間違いであるということも考えられなくもない。また、そのために、後述の、所属語彙との関係もやや不明瞭になった可能性もある。

る。読む調査の一つの問題であろう。

- 4) 大阪市を扱った岸江(1990)でもこの点は不明である。話者の数や地域が関係することもあるだろうが、大阪の場合は、もはや旧市街地にはほとんど人が住んでいないことと、第二次大戦ですっかり住民が入れかわったことも大きな原因だろうと思われる。
- 5) 但し都染(1989)によれば、(少なくとも付属語付きの環境で)テ2型の話者もある。そういう話者では、伝統的なテ0型は完全に絶滅したのであろう。調査語彙を増やして行っても、たぶん伝統的なテ0型の語例はみづかりそうにない。

引用文献

- 文献については、中井(1988, 下記)を参照。そこに掲げていない物のみを以下に示す。
- 犬飼隆他(1989)「近畿方言若年層のアクセントの動向」『神戸大学教育学部研究集録』83
- 上野善道(1989)「日本語のアクセント」『講座日本語と日本語教育』2 明治書院
- 岸江信介(1990)「大阪市若年層における二拍名詞アクセント」『方言音調の諸相—西日本—(1)』
科研報告書
- 真田信治(1990)「世代とことば」『日本語学』1990 4月号
- 都染直也(1989)『兵庫県中播地方言アクセント資料』科研報告書
- 徳川宗賢(1972)「ことばの地理的伝播速度など」『現代言語学』三省堂
- 中井幸比古(1987・1988)「京都旧市内における若年層のアクセント(1)(2)」『国語研究』50・51
- 中井幸比古(1990)「式の音調に関する二三の問題について」『香川大学教育学部研究報告第一部』79
- 馬瀬良雄(1981)「言語形成に及ぼすテレビおよび都市の言語の影響」『国語学』125

表 12. 2 モーラ体言調査結果一覧

説明：

1. 本資料のような場合 一人一人の話者の調査結果を詳細に示しても、あまり意味がないと思われる。そこで、調査語彙の一覧 各語について出現したA型 それぞれのA型で発話した話者の人数だけを示す。例えば「j1-84 j0-10」はその単語を「j1で読んだ者84名 j0で読んだ者10名」の意である。但し話者全員のアが一一致する場合は表示方法が異なることがある(表中1.4.1など)。
2. ここに示すのは f-n-fu nu nuaの諸タイプの話者93名の結果だけである。tタイプの話者6名については調査結果の提示を略する。
伝統的には 中央式の2モーラ体言には「j0 j1 j0 j2」の4つの型があるわけだが fu nu nuaタイプの場合、伝統的なj2型は存在せず 本稿の解釈で「付属語無しj0 順接付属語つき文節j2」の型に変化している。そこで「j0 j1 j0」の3型しか現れない項目については 原則として アのタイプに関わらず 一括して人数を提示する。「j2」が現れる項目については 原則として f-nタイプとfu nu nuaタイプを区別し「:」で両者の間を区切り、それぞれの人数を提示する。但し「付属語無しj0 順接付属語つき文節j2」の型は伝統的な「j2」とは区別すべきであるが、便宜上両者ともに「j2」と表記する。
例、「j0-89 j2-7: j0-60. j2-33」は「f-nタイプの話者については j0が89人 j2(伝統的なタイプ)が7人」「fu nu nuaタイプの話者については j0が60人 j2(伝統的なタイプではない)が33人」であることを示す。話者のうち w20(和歌山県南部川井村)は低起式の音調が他の話者と異なるが 区別せず 同列に扱う。
3. 調査語彙の漢字の右端の記号について。
*: 次の七つの環境で調査した項目。「単独言い切り。順接付属語付き言い切り。付属語なしで続ける 高起式文節後続 同 低起式文節後続。順接付属語付き続ける 高起式文節後続。同低起式文節後続。この～」
!: 次の三つの環境で調査。「単独言い切り。順接付属語付き続ける 高起式文節後続。同低起式文節後続。」
無印: 原則として「鳥と鳥」のような形のみ。但し一部の話者「鳥が」で、また数名だが 3モーラ以上の体言では単独形のみで読んだ者がある(今回提示する、2モーラ以下の体言はなし)。その場合 語末核型か無核型か不明だが、問題がない限り(他の同体系の話者が一致して無核型の場合)、一応無核型として処理する。問題が生じる場合は注記する。
4. 人数の数えかたは次のような方法に従う。
併用の場合は、それぞれの併用を1と数える。例えば ある語について、ある話者が「j1 j0 j0」の併用の場合「j1」「j0」「j0」のそれぞれについて、1と数える。従って 人数の合計は話者の数よりも多くなることもある。
たとえば 七つの環境で調査した語の場合、ある語について ある話者が、「j1」で4回 「j0」で3回発話したとする。その場合はj1. j0のそれぞれについて、1と数える。つまり 2回以上ある型で発話しても1回だけその型で発話したものと扱いをする。
5. 明らかに読み間違いと思われるものの扱いについて。読み間違いと思われるものは()に囲み 人数の後に「x」印をつける。例:「j0-91 (j2-2x)」は「その語をj0で読んだ者が91名、j2で読んだ者が2名あるが j2の2名はほぼ間違いなく読み間違い」。なお とりわけ、「*」つきの項目に読み誤りが多い。これは そこに最小対が多く含まれ しかもその最小対を続けて読ませたために、話者が混乱したと思われる。(他に「麻」と「朝」も続けて読ませた)。読み間違いかどうか不明瞭な場合は 「x印」はつけない。
6. 伝統的なアを決定するのはたいへん難しい。従来諸研究に基づいて決めたましたが、不備があるかもしれない。
7. 聞き取り不能・未録音 誤読の場合は A型の代わりに「?」と記す。例:「?-2」は これに該当するものが2名あることを示す。

表 12-1

1.1 「時間空間を示す一連の語」(本文参照)

今日! キョー ㄝ2-23 ㄝ0-19; ㄝ0-13. ㄝ2-45 ㄝ1-4
 今朝! ケサ ㄝ2n-38 ㄝ0-8; ㄝ0-5 ㄝ2-54 ㄝ1-3
 中* ナカ ㄝ0-22 ㄝ2-24; ㄝ0-48 ㄝ2-53
 外* ソト ㄝ0-46 ㄝ2-27; ㄝ0-23 ㄝ2-42
 他! ホカ ㄝ0-23 ㄝ2-17; ㄝ0-26 ㄝ2-42
 今! イマ ㄝ0-21. ㄝ2-24; ㄝ0-12. ㄝ2-47 ㄝ1-1
 此所! ココ ㄝ0-30. ㄝ2-17; ㄝ0-16. ㄝ2-45
 其処! ソコ ㄝ0-30. ㄝ2-16; ㄝ0-15 ㄝ2-47

1.2 伝統的にㄝ0の語

麻! アサ ㄝ0-35. ㄝ2-5 ㄝ-1; ㄝ0-32 ㄝ2-24 ㄝ1-3 ㄝ0-2. ㄝ-1
 跡(路面の)! アト ㄝ0-33 ㄝ2-7; ㄝ0-21 2-37 ㄝ1-1
 息! イキ ㄝ0-38 ㄝ1-1; ㄝ0-26 ㄝ2-33. ㄝ1-2
 板! イタ ㄝ0-38; ㄝ0-37 ㄝ2-26
 何時! イツ ㄝ0-37 ㄝ2-2; ㄝ0-50 ㄝ2-5
 海* ウミ ㄝ0-36 ㄝ2-1 ㄝ1-1; ㄝ0-32. ㄝ2-22. ㄝ1-8(本稿の
 調査地域については伝統的にㄝ0としてよいよう)
 帯! オビ ㄝ0-38; ㄝ0-40. ㄝ2-20
 数! カズ ㄝ0-37; ㄝ0-39. ㄝ2-19
 肩* カタ ㄝ0-38; ㄝ0-31. ㄝ2-27
 角! カド ㄝ2-28 ㄝ0-10; ㄝ0-15. ㄝ2-43
 屑! クズ ㄝ0-27. ㄝ2-12; ㄝ0-21 ㄝ2-38 ㄝ1-3
 汁! シル ㄝ0-36. ㄝ2-3; ㄝ0-36 ㄝ2-23
 空! ソラ ㄝ0-37. ㄝ2-1; ㄝ0-24 ㄝ2-31
 種! タネ ㄝ0-38; ㄝ2-30 ㄝ0-24 ㄝ1-1
 何* ナニ ㄝ0-93
 箸* ハシ ㄝ0-37 ㄝ1-2; ㄝ0-41 ㄝ1-8 ㄝ2-14
 針! ハリ ㄝ0-36 ㄝ1-2; ㄝ0-32 ㄝ2-27 ㄝ1-1 ㄝ-1
 船! フネ ㄝ0-37 ㄝ2-1; ㄝ0-29 ㄝ2-30 ㄝ1-2
 松* マツ ㄝ0-38; ㄝ0-36 ㄝ2-19 ㄝ1-10
 麦! ムギ ㄝ0-35 ㄝ2-3; ㄝ0-28 ㄝ2-29 ㄝ1-3 ㄝ0-1
 薬! ワラ ㄝ0-38; ㄝ0-27 ㄝ2-23 ㄝ1-10

1.3 伝統的にㄝ2の語

晋! アオ ㄝ2-93
 赤! アカ ㄝ2-93
 朝! アサ ㄝ2-34. ㄝ0-4; ㄝ2-50 ㄝ0-6 ㄝ1-4
 秋* アキ ㄝ2-38; ㄝ2-53 ㄝ1-7. ㄝ0-1
 汗! アセ ㄝ2-37 ㄝ0-1; ㄝ2-55
 雨* アメ ㄝ2-38; ㄝ2-55 ㄝ1-4
 井戸! イド ㄝ2-35 ㄝ1-3; ㄝ2-52 ㄝ0-6
 桶! オケ ㄝ2-35 ㄝ1-4 ㄝ0-2; ㄝ2-32 ㄝ0-4 ㄝ1-25
 蔭! カゲ ㄝ2-37 ㄝ1-1; ㄝ2-55. ㄝ0-2
 蜘蛛! クモ ㄝ2-37. ㄝ1-1; ㄝ2-54. ㄝ0-1 ㄝ1-1
 黒! クロ ㄝ2-38; ㄝ2-54. ㄝ1-3
 鯉! コイ ㄝ2-37. ㄝ1-1; ㄝ2-48. ㄝ0-1. ㄝ1-9
 鮭! サケ ㄝ2-38; ㄝ2-48 ㄝ1-10 ㄝ-1
 猿* サル ㄝ2-38; ㄝ2-55 ㄝ1-1. ㄝ0-1
 白! シロ ㄝ2-38; ㄝ2-54 ㄝ0-0 ㄝ1-1
 縦! タテ ㄝ2-37 ㄝ1-1; ㄝ2-55. ㄝ0-1
 足袋! タビ ㄝ2-36. ㄝ1-2; ㄝ2-43. ㄝ0-7 ㄝ1-8
 鶴! ツル ㄝ2-38; ㄝ2-47. ㄝ1-8
 鍋! ナベ ㄝ2-38; ㄝ2-54. ㄝ1-3
 春 ハル ㄝ2-38; ㄝ2-49 ㄝ0-1. ㄝ1-6
 鮎! フナ ㄝ2-38; ㄝ2-54. ㄝ0-1. ㄝ1-2
 蛇! ヘビ ㄝ2-38; ㄝ2-52 ㄝ0-1. ㄝ1-2
 前! マエ ㄝ2-93
 窓* マド ㄝ2-38; ㄝ2-52. ㄝ0-4 ㄝ1-2
 窓! マド ㄝ2-38; ㄝ2-55. ㄝ0-1
 亀! カメ ㄝ2-38; ㄝ2-53 ㄝ0-1. ㄝ1-2

1.4 伝統的にㄝ0型の語彙

1.4.1 話者93名全員30 30語

牛 ウシ 梅 ウメ 枝 エダ 風 カゼ 蟹 カニ
 壁 カベ 釘 クギ □* クチ 首 クビ 腰 コシ
 酒 サケ 皿 サラ 袖 ソデ 竹 タケ 棚 タナ
 爪 ツメ 鳥 トリ 庭 ニワ 蠅 ハエ 蜂 ハチ
 羽根 ハネ 髭 ヒゲ 蓋 フタ 筆 フデ 右 ミギ
 水* ミズ 道 ミチ 虫 ムシ 桃 モモ 横 ヨコ
 (以上1類)

1.4.2 全員20に準じるもの 8語

船* アメ 20-93 (22-2x) 此 コレ 20-92 (?-1)
 底 ソコ 20-86 (22-6x, 20-1x) 何処 ドコ 20-90, 20-3
 西 ニシ 20-92 (21-1x) 端* ハシ (21-1x 22-1x)
 鼻* ハナ (21-1x) 百合 ユリ 20-90 21-3
 (以上1類)

1.5 伝統的に21の語 52語

1.5.1 話者93名全員21 38語

石* イシ 歌 ウタ 紙* カミ 次 ツギ 梨 ナシ
 夏 ナツ 昼 ヒル 冬 フユ 町 マチ 胸 ムネ
 村 ムラ 雪 ユキ (以上2類)
 垢 アカ 足* アシ 網 アミ 犬* イヌ 芋 イモ
 色 イロ 腕 ウデ 馬 ウマ 裏 ウラ 親 オヤ
 貝 カイ 鍵 カギ 髪 カミ 草 クサ 靴 クツ
 熊 クマ 米 コメ 塩 シオ 島 シマ 年(～をとる) トシ
 店 ミセ 耳 ミミ 山 ヤマ 指 ユビ 夢 ユメ
 綿 ワタ (以上3類)

1.5.2 全員21に準じるもの 14語

痣 アザ 21-91, 22-2 岩 イワ 21-92, 20-1 22-1
 音 オト 21-91, 20-2 蟬 セミ 21-89, 20-4
 串クシ 21-91, 22-1, 20-1 下シモ 21-37 20-1; 21-50 20-5
 橋* ハシ 21-92 (22-2x 20-1x) 肘 ヒジ 21-92 20-1
 (以上2類)
 池 イケ 21-92 22-1 櫛 クシ 21-92, 22-1
 栗 クリ 21-92 20-1 坂 サカ 21-90 22-3
 墨 スミ 21-92 20-1 谷 タニ 21-85 20-8
 花* ハナ 21-93 (20-4x) (以上3類)

1.5.3 伝統的に21だが変化が目立つもの 4語

あれ(指示語) アレ 21-10, 20-28; 21-3, 20-54
 北 キタ 21-34, 20-4; 21-34 20-21
 虹 ニジ 21-25, 20-13; 21-15, 20-38 22-2
 人 ヒト 21-35, 20-3; 21-38, 20-17
 (以上2類)

1.6 地域により希少型になる語彙

上* ウエ 20-93 (20-1x)
 上の ウエノ 20-31, 22-7; 20-53 22-2
 下* シタ 20-93
 下の シタノ 20-30, 22-8; 20-53 22-2

1.7 伝統的にアが地域などによって異なる物

穴 アナ 20-36, 22-2; 20-21, 22-31 20-1, 21-2
 皮 カワ 20-34, 22-3, 21-1?; 20-21 22-32 21-2
 玉(水晶の～) タマ 20-37 22-1; 20-23 22-30 21-2
 豆 マメ 22-36 21-1 ?-1; 22-53 21-2
 鳩! ハト 22-38; 22-48 21-9 ?-1
 奥 オク 21-34 22-4, 20-2; 21-49 22-5, 20-5